



ブラジル特報

No.1683
2024年11月号

特集 サンバの奥深さを語る

- ・パークリー・ロンドン経由リオへ サンバのとてつもない奥深さ
- ・ブラジルとのリズム人生<前編>

あの町この町

サントアマーロ Santo Amaro (BA)



PASSEIO DE DOMINGO A TARDE

新規会員募集中!

詳しくは協会へお問合せください。



一般社団法人 日本ブラジル中央協会

URL <http://nipo-brasil.org/> E-mail info@nipo-brasil.org

〒105-0004 東京都港区新橋 1-18-2 明宏ビル本館 5階 TEL:03-3504-3866 FAX:03-3597-8008 発行人: 大前孝雄/編集人: 岸和田仁



鉄とともに、人とともに。 私たちのSDGs

ふとまわりを見れば、社会は鉄でできたものにあふれています。様々なものづくりで暮らしを便利に快適にしたり、災害に備えインフラをより強く安全に変えたり、豊富な資源と高いリサイクル性で環境負荷を軽減したり…鉄はこれからも、人と地球の未来をささえる無くてはならない素材です。だからこそ、日本製鉄は鉄を進化させ続け、皆さまと力を合わせて持続可能な社会づくりに取り組んでいきたい。私たちのSDGsに、終わりはありません。

あの町、
この町

サントアマーロ Santo Amaro (BA)

サントアマーロは、バイーア州都サルヴァドールから西方約80kmに位置する、面積493km²、人口6万人の都市だ。サントアマーロ・ダ・プリフィカソンという愛称で言われることが多い。バイーア・ジ・トードス・オス・サントス湾を囲むこの地域一帯はヘコンカーヴォ・バイアーノと呼ばれている。

サントアマーロはポルトガル人入植者たちによって1557年に村として誕生した。16世紀から20世紀のはじめまで、サトウキビ、タバコ、キャッサバ芋の主要生産地として栄え、1837年にはLeal Cidade de Santo Amaroという名で市に昇格した。1847年からサルヴァドールからの定期船が出るようになると、人の往来が激増した。1855年にはコレラが流行し、市の人口の半数以上が亡くなった。現在のサントアマーロの主要財源は観光産業だ。古い教会や邸宅建築が多いほか、あまり知られていないが、滝やビーチなど、美しい自然の見どころもある。

サントアマーロは、1960年代から活躍し、82歳となった現在も第一線で活躍している国民的歌手カエターノ・ヴェローゾと妹で歌手のマリア・ベターニアが生まれ育った地として有名だ。また、カルメン・ミランダのために作られたといわれるサンバの名曲「ブラジルパンデイロ」の作者であるアシス・ヴァレンチもサントアマーロ出身だ。音楽的にこの地域はサンバ・ジ・ホーダ発祥の地とされている。サンバ・ジ・ホーダとは、サンバの起源といわれている音楽のジャンルで、ギターとパンデイロ、プラト・イ・ファカ（お皿とナイフ）などの打楽器の伴奏で歌われる歌と、独特のステップを踏むダンスが特徴だ。

年間を通じて多くの宗教的な祭りや祝いごとが開催されるが、毎年カーニバル前の1月末から2月初めにLavagem da Purificaçãoという市最大のお祭りが催される。管楽器で街中を練り歩く楽団のパレードが行われるほか、ノッサ・セニョーラ・ダ・プリフィカソン教会前の広場にはステージが設置され、主にバイーアにゆかりのあるアーティストが出演しお祭りに花を添える。年によって変わるが、カエターノやマリア・ベターニアは元より、カエターノの息子モレーノ・ヴェローゾ、ジルベルト・ジルやカルリーニョス・ブラウン、エルバ・ハマーリョ、マルチナリアなどの一流歌手たちが、1日中ステージで無料コンサートを行う。これを目当てにブラジル全土から観光客が多く集うほどだ。



目次

あこの町
サントアマーロ [株式会社アルファインテル] 3

ブラジル・ナウ
サンバの深奥さに改めて思いを馳せる
[岸和田仁] 5

【特集】サンバの奥深さを語る
バークリー・ロンドン経由リオへ
サンバのとてつもない奥深さ
[加々美淳] 6

【特集】サンバの奥深さを語る
ブラジルとのリズム人生<前編>
[K Ta ☆ brasil] 8

慶應義塾大学国際医学研究会
第47次派遣団が体験したブラジル
[阪埜裕理] 10

ブラジル現地報告
ブラジル最大の酪農産地とオランダ移民の底力
[山本綾子] 12

新刊書紹介 13

キャンパス・コラム
ブラジルに魅了されて [有馬 倅] 13

連載・ビジネス法務の肝
ブラジルにおける「ビジネスと人権」
に関する取組みの現状 [柏 健吾] 14

連載・勤どころ～税務&ホットトピック～
ブラジルの給与平等法：
より公平な未来に向けた進展と課題
[天野義仁 / 佐々木健文 / Valter Shimidu] 15

エッセイ
ブラジルに響く、日本の歌 [中里春奈] 16

浜松城がブラジルカラーに染まる
多文化共生を象徴する一夜
[文責：在浜松ブラジル総領事館] 17

連載・文化評論
ブラジル文学に新境地を切り開いた作家マルシオ・ソウザの死
アマゾン発の小説作品は強烈に面白かった
[岸和田仁] 18



写真＝永武ひかる
「表紙のひとこと」
「リオ湾岸地区で目にとまったグラフィティ『日曜午後の散歩』 Airá O Crespo 作。元絵は19世紀、当時の暮らしを描いた Jean-Baptiste Debret の作。黒い肌に裸足の面々が洒落た格好で楽器を鳴らし、そぞろ歩きか。当時の音を聞きたくなる」
永武ひかる：ブラジル撮影約30年、著作に写真絵本「世界のともだち3 ブラジル」（備成社）等。www.hikarunphoto.com

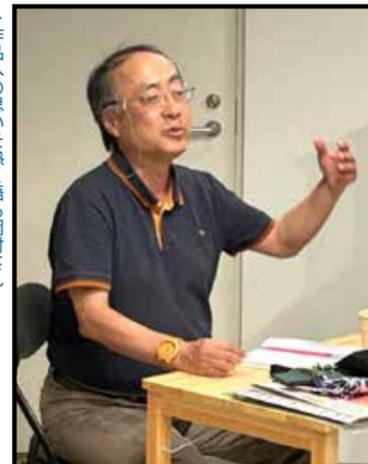
文：株式会社アルファインテル
https://santoamaro.ba.gov.br/lavagem-da-purificacao-2023-resgata-o-protagonismo-de-santo-amaro-como-guardia-da-cultura-e-da-fe/ より

広島から Tudo Bem?

映像作家岡村淳さん上映会 被爆者協会の故森田隆さんをしのぶ

上映会・トークイベント『ブラジル在住の映像作家 岡村淳の世界』が8月17、18の両日に開かれ、それぞれ約20人が参加した。昨年10月、今年5月につづき3回目。被爆79年関連企画となったこのたびは広島日伯協会が協賛した。

岡村さんは1987年にブラジルに渡って以来、映像作品を制作・発表。2013年にはじめての著書『忘れられない日本人移民 ブラジルへ渡った記録映像作家の旅』（発行・港の人）を刊行した。



▶作品への思いを熱く語る岡村さん

その中で一章を割いている在ブラジル被爆者協会（現在は解散）の元会長で、8月12日に100歳で亡くなった森田隆さんの映像を上映したこともあり地元紙も大きく取り上げた。森田さんは21歳で被爆、1956年にブラジルに移住した。84年に被爆者支援団体を立ち上げ、在外被爆者の支援活動を展開した。17日には「私の戦後は終わらない ブラジルに渡った被爆者たち」（1995年、30分）、「リオフクシマ」（12年、104分）を上映。翌18日には、「消えた少女たちの夢 アルゼンチンの被爆花嫁たち」（96年、30分）、「リオフクシマ2」（18年、102分）を上映した。

被爆地を中心とした活動やニュースが多く報じられるなか、多角的に被爆問題を考える場ともなった。被爆者継承事業の関係者や、長く在外被爆者巡回診療に携わった在広の医師らも来場した。

岡村さんは「ご近所さんだった森田さんへの思いはあまりある。これだけ広島で森田さんが慕われていたとは驚き」と話した。次回の上映会の主催を提案する来場者もあり、今後、広島各地での上映会も期待される。

土橋フェイラ、ブラジル人雑貨店も参加

昨年から市内のカフェで開催されている「土橋フェイラ」が定着してきている。ブラジルに滞在経験のある店長がブラジルの朝市（フェイラ）を通してブラジルの文化や賑わいを創出することを目的

に開いている。産地直送の野菜やパステル、ブラジルのお菓子なども販売、フェイジョアダなども提供している。

広島市内に今年、ブラジル食材や雑貨を販売する店を開いたダニエリさんも声をかけられて初出店。ブラジルのお菓子や調味料に関心を示す来場者に笑顔で対応していた。

「店の宣伝にもなった。こうした場で広くブラジルの文化などが知られるのは嬉しい」と笑顔を見せていた。



ブラジルで修行したギターを披露 金田聖治さんが広島で初ライブ

ブラジルで音楽を深く学んだ金田聖治さん（奈良県在住）が広島市内のカフェでライブを行った。ブラジルで親交のあった店長が呼びかけ実現した。

金田さんは関西での活動後、2009年に拠点をサンパウロに移し、サンパウロ州立音楽院に入学。ブラジル人ミュージシャンに師事しながら、サンパウロ市内のバーやレストラン、イベントも行い研鑽を積んだ。昨年帰国してからは、ギター教室などで後進の指導に励んでいる。

ライブでは自作曲を含め10数曲を披露、参加者らは、独特の世界感に酔いしれていた。会場となったカフェの店長で今回のイベントを企画した堀江裕介店長は「広島にブラジルの風を運んでくれた。また開催できれば」と話していた。



広島日伯協会

ブラジルと広島の交流を推進するため1969年に創立。在広島ブラジル人との多文化共生社会を支援し、ブラジル広島文化センター（県人会）と県、市ほか関係市町村と連携を取りながら活動している。法人会員75、個人会員80。田中秀和会長（6代目、2020～）は、在広島ブラジル連邦共和国名誉領事。



サンバの深奥さに改めて思いを馳せる

朝日新聞社が出版事業の一環として朝日新書を出版しているように、フォリャ・デ・サンパウロ新聞社はフォリャ・エスプリカという入門書の新書シリーズを刊行している。そのラインアップ（既に70冊以上刊行されている）をみると、朝日新書よりも、ちくま新書や中公新書で刊行されてきた新書群に近いものが多いが、このシリーズの一冊『ブラジルにおける人種主義』（2001年刊）はブラジルにおける人種問題をわかりやすく解説している良書である。その歴史的背景を読み解きながら、様々なエピソードを交えつつ、平易な文体で叙述しているからだ。その著者、歴史人類学者リリア・モリツ・シュワルツ教授は、第1章において、1930年代になって、それまでネガティブに捉えられていた人種混濁というファクトをポジティブにとらえる視点が一般国民にも受け入れられる時代となり、「黒人の騒音」とみなされていたサンバが国民文化に「昇格」していった、と説いている。

そのさわりの部分を翻訳すると、「（1930年代に入ると）様々な文化構成要素の非アフリカ化が進むようになり、そのプロセスと並行して、公的なスペースにおいて『人種混濁がナショナルなものに転化』した。例えば、以前は『奴隷の食べ物』として知られていたフェイジョアダが、1930年代に入ると、『国民食』に昇格し、人種混濁をシンボリックに象徴する代表料理の地位を得ることになった。黒フェイジョン（インゲン豆）とコメが、ブラジル国民を構成する二大人種（黒人と白人）を隠喩的に意味し、そこに、森林の緑を象徴するコウベ（ケール）と、金色を象徴するオレンジが加わって、フェイジョアダが完結する。

フェイジョアダの例だけではない。1890年の刑法では犯罪と規定され、19世紀末まで警察によって弾圧されていたカポエイラも、1937年に国民的スポーツとして正式に認知された。同様に、社会的に疎外されていたサンバも正式に国民文化となり、1935年からエスコラ・デ・サンバのパレードが正々堂々と街頭で行われるようになった。」

すなわち、19世紀後半に誕生したと思われるサンバは、1920年頃までは、まだ、公共スペースでは演奏が禁じられていたのだ。初期サンビスタの一人ジョアン・ダ・バイアーナ（1887-1974）の証言によれば、彼が1908年リオのペーニャ通りでサンバを演奏していたら、警察にパンデイロ（タンパリン）を没収されてしまった。彼いわく「そのころサンバは禁じられていて、パンデイロも禁止だった」。そんなサンバ受難の時代も、徐々に変化していき、

1916年には、最初のサンバルバム“Pelo Telefone”のレコーディングが行われ、1933年になると、ヴァルガス政権で法務大臣や外務大臣を務めたオズワルド・アラニャが、ピシギーニャ率いるサンバ演奏を聴いた後、有名なサンバ礼賛演説をぶつ。「（サンバ演奏に対して）私が持ち合わせるのは称賛の言葉だけだ。彼らこそ我が祖国を代表する人々だ。私は真の国民音楽であるサンバを、ずっと長いこと応援しつづけてきた者の一人だ。（中略）ブラジルは、この新しい音楽、我々独自の音楽とともに、これからは自分たち自身を崇拝して行くことだろう。」という、威勢のいいナショナリスト的発言だった。

エルマノ・ヴィアナの快著『ミステリー・オブ・サンバ』によれば、サンバが国民音楽になれたのは、1926年にピシギーニャと出会った社会人類学者ジルベルト・フレイレという仲介者のおかげだ、となる。といった、様々なエピソードを軽くフォローするだけでも、実にワクワクしてくるのであるが、サンバの意味する世界の広さ、深さ、多様さは、強烈に面白い。

例えば、弁護士転じてサンビスタ、作詞作曲家にして歴史研究者でもあるネイ・ロベス（1942年生まれ）は、中高生向け『学習用アフロ・ブラジル辞典』において、サンバをこう定義している。

「アフリカ起源の、ブラジルで古くから存在してきた様々な舞踊、並びに、そうした舞踊それぞれに随伴する音楽、その両方の総称。現代では、サンバという名詞は、その主たる骨格を構成し、ブラジルポピュラー音楽（MPB）の主流となっている多様な音楽表現を意味する。その起源がバントゥー語であることは議論の余地のない明白なことであるが、サンバという用語は、南部ラプラタ（ウルグアイ）地方においてはサンバないしセンバと呼ばれており、カンドンベとして広く知られている祭礼をも意味していた。」

と、ざっくりとサンバの意義をメモしてみたが、弊誌の今号の特集「サンバの奥深さを語る」を通じて、改めてサンバの多層的魅力を再考したい。

大変刺激的な論稿を寄稿していただいたのが、クラシック音楽を英国と米国で究めてからサンバの世界に転じた異才である加々美淳さん、そして、リオのパーカッション部隊を20年間も現場で率いてきたことで、Império Serranoの認定指導者証を授与されたケイタ・ブラジルさん、のお二人である。お二人の玉稿を玩読していただければ幸いである。

岸和田仁（『ブラジル特報』編集人）

バークリー・ロンドン経由リオへ サンバのとてつもない奥深さ



加々美淳
(ギタリスト・ヴォーカリスト)
PH:K.Ichikawa

サンバとの出会い

僕が初めてブラジルを訪れたのは1981年。もう43年も経ったとは、月日の流れには驚かされる。ブラジルへ行ったのはサンバを知りたかったからだ。僕が初めてブラジルのサンバを聴いたのは、イギリス王立音楽大学時代、友人の家でのレコードだった。バークリー音楽大学時代に、アメリカ人が演奏するサンバを聴いたことは何度もあった。しかし、小さい頃からウィンナ・ワルツが好きだった僕は、イギリスの友人宅で初めて聴いたブラジルのサンバにウィンナ・ワルツと同じ揺れを感じ、サンバに深い興味を持ったのである。ブラジルのサンバに、パッサダからのクラシック音楽の流れがあることも面白く、当時の僕には新鮮だった。

アメリカとイギリスでの生活経験がある僕にとって、ブラジルでの生活は驚きの連続であった。とにかく皆お喋り好きである。信号待ちしている時も話かけられてしまう。当時の僕はポルトガル語がまだちゃんと話せなかったが、少し話すと皆喜んでくれて、皆ポルトガル語を教えてくれた。これは、アメリカでもイギリスでも経験したことがなかったので、面白かったし、嬉しかった。

師匠ジョルジーニョについて

Jorginho do Pandeiro (ジョルジーニョ・ド・パンデイロ 1930 - 2017) という音楽家をご存知だろうか。16歳でプロデビューして以来、70年間に渡ってブラジルのサンバ・ショー界を形作ってきた打楽器奏者・作曲家であり、ブラジル音楽界の至宝である。幸運にも僕は、1986年からジョルジーニョが

亡くなる2017年までの31年間、彼に師事することとなったのである。

ジョルジーニョとの出会いは、とても素晴らしいものであった。当時僕は、日本と言う美空ひばりさんのような国民的大歌手 Elizeth Cardoso (エリゼッチ・カルドーソ 1920 ~ 1990) の家によく遊びに行っていたのだが、ある日、エリゼッチがジョルジーニョの家の電話番号を教えてくれたのだ。すぐに電話をかけてみたら、なんと、いきなり本人が出た。「僕は日本人で、日本からサンバを勉強しにブラジルに来ている」と伝えた。ジョルジーニョは「今どこにいる？住所は？今からそこへ行くから待っている」。半信半疑で待っていると、2時間後、彼は本当に僕の部屋まで来てくれた。当時の僕にとって、ジョルジーニョは雲の上の音楽家で、レコードでしか聴いたことのない「ブラジル音楽界の至宝」なのだ。そんな偉大な音楽家が、ハンデイクを持って僕の部屋を訪ねて来てくれた。感動した！

ジョルジーニョは、色々サンバの話をしてきて、ハンデイクを演奏してくれた。そして僕に「ギターを弾いてみる」と言った。僕は、自分なりに学んだサンバを弾いた。ジョルジーニョは「なかなか弾くじゃないか」と言ってくれた。そうでしょう！と内心鼻が高くなっていた僕に、ジョルジーニョは「次はサンバを弾いてみる」と言ったのだ。訳が分からなかった。その時ジョルジーニョに言われたことが「君はサンバをリズムだと考えている。サンバとはリズムの名前ではなく、グルーブ (balanço バランソ・揺れ) の名前なんだよ」。僕は本当に驚いた。それまでリズム練習を毎日欠かさずやってきたのに無駄だったのか、と愕然とした。(後々、リズム

改めてサンバとは？

では、サンバのグルーブ、揺れとは何か？一説によると、全ての音楽は言語のグルーブから生まれる、と言われている。その説に則って考えると、サンバは、ブラジル・ポルトガル語のグルーブから生まれた音楽である。ブラジル・ポルトガル語を音楽的に考えてみると、発音がリズム、発音がグルーブだと捉えることができる。そう考えると、リズムからグルーブは生まれない。グルーブの中にリズムが存在するのである。つまりサンバは、ブラジル・ポルト



▲Rio/Via Isabelにある、ブラジルを代表する作詞作曲家 Noel Rosa の像
盗難や破壊の被害にあいながらも、今も街のシンボル

ガル語の発音=グルーブと、発音=リズムの組み合わせから生まれた音楽だと言えるであろう。例えば、日本では「サンバ・ポソノバはシンコペーションが沢山あって難しい」という声をよく聞くが、ブラジルでは聞いたことがない。ポルトガル語ではそれが当たり前だからだ。ポルトガル語は基本的に、単語の終わりの一つ前にアクセントがある。音楽的には、そのアクセントが小節の頭、もしくは16分音符1個分前になる。だから、アクセントの前の音は、全てシンコペーションになるのである。

随分前の話だが、ポルトガル語の Estrela (エストレラ)、Passarela (パッサレーラ) 等の rela の発音が上手くできなくて友人に注意されたことがあった。僕は「じゃあブラジル人はみんなできるのか！」と、ムッとしてしまった。彼は一瞬考えて、「アイツできない！」。そうか、ブラジル人でもできないのか。その時、日本でも日本人より綺麗な発音ができる外国人がいるけれど何が違う、酷い発音の日本人なのに日本人だと分かる、これは一体何なのか、と思った。そして、話

とグルーブの関係を研究するには、リズム練習がとても大事だということに気付くことになる。) ジョルジーニョのこの言葉が大きなきっかけとなり、本気でサンバを学ぶには、今まで音楽大学で学んできたことを一度全て捨てなければならぬ、と、僕は覚悟を決めたのだ。

◀師匠 Jorginho ファミリーと。
左から、Celsinho、Jorginho、加々美、Ginho



Radio Nacional での公開生放送の様子。
右端は、師匠 Jorginho ▶



ずとは作曲なのだ、と気が付いた。話し言葉とは、言語とメロディがあって成り立っていることに気が付いたのである。それから、会話する時には発音だけではなくメロディも聴くようになり、サンバがますます面白くなっていった。

リオデジャネイロでのレコーディングを重ねるうちに、気が付いたことがある。一緒に演奏する時、ブラジル人は他のプレイヤーに合わせての演奏はしない。楽曲の中の自分の役割に徹するのだ。そこから素晴らしい演奏が生まれる。人と合わせるのではなく、自分とその楽曲の関係を演奏するのである。その時に演奏者が共有するのが、ブラジル・ポルトガル語のグルーブなのである。

多文化共生の国ブラジル

ブラジルは、私達日本人にはなかなか理解し難い国なのではないかと思う。国土の広さ、言語の違い、気候など、沢山のことが日本とは異なっている。北が暑く南が寒い、それだけでも少し難しいのではない。黒人、奴隷など、現代社会では問題になりかねないような言葉も平気で使う。黒いから黒いと言い、奴隷だから奴隷と言う。そう言えるのは、差別がないからだろう。ブラジルは、多文化共生の国なのである。サンバがそれを象徴している。

ブラジルの友人が、自分の両親、両親の両親、そのまた両親がどこの国の人なのか話してくれたことがあった。結局、8ヶ国くらいの国名が出てきたので、「そうするとお前は何ジン？」と聞いたら、「オレはブラジル人！」。スゴイ！ わからないくらいの混血がブラジル人なのか!! サンバを、外国人(ブラジル以外の国の人)が習得するのは難しい。色々な国をルーツに持つ作曲家がいるので、曲調が作曲家によって全然違う。曲調が違っていると、別の音楽に聴こえたりする。でも、全てサンバなのだ。



▲Rio/SantaTereza のスタジオで、レコーディングの様子

ここで、ジョルジーニョの言葉を思い出す。「サンバとは、グルーブ(揺れ方)の名前」。曲調が違って揺れ方が同じ、それこそがサンバなのである。ポルトガル語という共通の言語から生まれた音楽、サンバ。そこに、多文化共生が確かに存在する。

ブラジル人の友人との会話でこんな話があった。彼は何年も一緒に演奏しているミュージシャンの悪口をよく話しており、嫌いだと言うので、ある日尋ねてみた。「そんなに嫌いなのに、なんで長い間一緒に演奏しているんだ？」。彼の答えは、「え？あいつ上手いよ！」だったのだ。坊主憎けりゃ袈裟まで憎い、は、この国では通用しないのだ、と思った。そして、多文化共生とはこういうことなのかな、と考えるようになったのだ。自分が嫌いな人の能力を認めることができる人達、そんな人達が集まっている国ブラジル。そして、そんな国の音楽がサンバなのだ。

リオデジャネイロから来たブラジル人の友人を車に乗せて、都内を走っていた時のことである。信号待ちで止まった所の横で、幼稚園の運動会の閉会式をやっていた。友人が「あれはなんだ？」と聞くので説明をしたら、「すごい、あんな小さい子が並んでいる。ブラジルは大人も並べないのに！」と、とても驚いていた。ブラジル人は人と同じ動きができない、と言うより、人と同じことをするのが嫌なのだ。音楽の世界でも、人と同じような演奏はしたくない、誰々のコピーなんてとんでもない、というミュージシャン達が大半いる。それがサンバの世界なのである。

楽器の練習はサンバの勉強ではない

ジョルジーニョとランチをしていた時だった。「どうして最近のミュージシャンは楽器の練習ばかりして、サンバ、音楽の勉強をしないのだろうか？」。

ジョルジーニョの兄であり、サンバ・ショーの7弦ギターの奏法を確立した天才、Dino 7cordas (ディノ・セッチコルダス 1918 ~ 2006) に言われたことがあった。「ギターの練習をするな。ギターが上手くなってもサンバは弾けないよ」。

ジョルジーニョが来日した時のことだ。日本のミュージシャンの演奏を聴いて、「みんなこんなに上手いのに、なんで正確な演奏をするんだ？」と不思議がっていた。日本では正確な演奏を求められることが多いのに…。つまり、正確な演奏では、音楽が「揺れ」ないのだ。音楽とは、サンバとは、難しいものである。

学生時代、自分が生涯を通して追求できる音楽を求め、サンバに辿り着いた。ブラジル・ポルトガル語が醸し出す美しいメロディと独特の揺れ、様々な国をルーツに持つ人達から生まれてくる豊富な曲調。サンバは美しい。ブラジルで演奏活動をするようになってから、自分の意識の変化に気が付いた。それは、人と自分を比べなくなったことだ。自分のルーツは自分だけのものであり、自分の中から生まれてくる音楽は自分だけのものである。それを、人と比べても意味のないこと。

そういう喜びも、サンバとブラジル、そしてブラジル人に気付かせてもらったことだ。感謝してもし尽かせない。その思いを胸に、自分と音楽の関係をどこまで深めていけるのか、どこまで追求していけるのか。僕自身、これからの自分自身を楽しみにしている。



▲Rio/Santa Tereza のレコーディングスタジオからの風景

ブラジルとのリズム人生

<前編>



KTa ☆ brasil
(ケイタブラジル)

▼モアシール・ルース師と筆者



地の第三国に呼ばれて活動して来た。

打楽器奏者として、これまで色々な国籍、ジャンルの作品に参加してきた。その殆どが、ブラジル各地で長年習得してきた種々のフォルクローリカを用いたものだ。これまで日本の人気著名アーティスト（日本レコード大賞を複数回受賞、紅白やフジロックに何度も出場）の作品、世界的な英国人DJのテクノ作品、グラミー受賞英国人の作品、大好きなキューバ音楽の一流奏者たちとも共演して来た。しかし、やはりブラジルのアーティストの作品への参加こそ別格の至福であった。少し選んでみると、Moacyr Luz e Samba do Trabalhadorのコアメンバーで長年共演しているMingo Silvaのソロ作品、Império Serrano（以下インペーリオ・セハーノ）のアルバムへの招集（CDの帯にも記名）、イタリアから世界（日本でもメジャー）リリースされヒットしたブラジル人デュオKaleidoscópioのアルバムへの参加曲についてブラジルで評価され、そしてブラジルのエッセンシャルな音楽を最もセンス良く世界に配給し続けている事で知られる英国のレーベルMr.Bongoのコンピレーションに私のフィーチャリング曲が選ばれた事などだ（しかも私をブラジル人だと勘違いしている）。



▲サンバ・ド・トラバリアードルと筆者
余計な音、意味合いや把握の無い演奏は存在しない。 Foto: Tyno Cruz

33回目のブラジルでの活動は、2024年明けより開始。ミュージシャンとして例年通り、巨匠Moacyr Luz（モアシール・ルース：数々の有名曲の作者・著名ミュージシャンへの楽曲提供も多数、ラテン・グラミー賞ノミネート、ブラジル音楽大賞複数回受賞）率いる、Samba do Trabalhadorとの12年目～60数回目のLIVE（Roda de Samba）に毎週出演して来た。会場であるRenascença Clubeの公式SNSでは今年も（毎年）が複数紹介されたが、ご覧になった方はいらっしゃるだろうか。外国人として初めてここに出演を許され早12年。彼らと小生との長年に渡る活動は、世界配信放送の英：BBC World News TVや、O GLOBO紙では何度も紹介された。一方いつもながら、



▼モアシール・ルースと筆者。 Foto: Tyno Cruz

日本で息巻くブラジル音楽関係者、レポートする日本メディアや日本人ジャーナリストは現場には誰もいないので、仕方なく自らNHK、J-WAVE、音楽誌、共著書、ネット他で何度も日本へご紹介して来たが、読者の諸兄はご存知だろうか。サンバに限らず、様々なジャンルのリオを代表するミュージシャンたちとここで共演させていただいて来た。

Renascença Clube（ヘナセンサ・クルービ）は、今年73周年を迎え、既にリオ市無形文化遺産にも指定されているが、この5年ほどですっかり観光地化されてしまった。その名「ヘナセンサ」=ルネッサンスが表すように、リオにおけるアフロ・ブラジレイラ文化の再生、復興、発展のために1951年に創立された。場内奥手のクアドラの壁中

に並ぶのは、ネルソン・マンデラやマーティン・ルーサー・キング・ジュニアから、レリーア・ゴンザレスまで、様々なアフリカ系指導者たちの大きな肖像とメッセージだ。また、小生：アジア人の噂を聞き付けた、サンバ好きの韓国大使もやってきて熱唱し、話題となった。

サンバとは何か？ Renascença Clubeは、サンバの本場：リオを代表するRoda de Samba（ホーダ・チ・サンバ=輪になってサンバする、サンバの原形）の歴史的な現場だ。イベントの内容は基本的にはSamba de Raiz：サンバ・チ・ハイス（ルーツ・サンバ）のホーダだ。その看板的存在が、毎週月曜、モアシール・ルースによって主宰され“Melhor Roda de Samba”の受賞もしたのがSamba do Trabalhador：サンバ・ド・トラバリアードルなのだ。日本の雑誌にて本邦初紹介し、モアシール・ルースへのインタビューも複数掲載した。その後、日本のメガストアや専門店でもそのCDやDVDが販売されて来た。

筆者が最初に訪れた2006年～2010年代初頭頃は、今のように商業化されておらず、リオを代表するサンバの作曲家たちが毎週、新曲を持ち寄って演奏する、まさに作曲のためのクリエイティブなホーダだった。ここでは商業的にポップな内容や、いわゆる「バゴーチ」、そしてサンバの深遠な意味合いを知らず、「表層だけを真似て形骸化してしまったアレンジだけのサンバ」、などではなく、脈々と伝わるルーツ・サンバのルネッサンス「サンバとは何か？」がまさに色濃く行われて来た。2000年代に日本でよく「ラバ地区の新世代によるルーツ・サンバの復興」と、現地に来て観たことも



▲ブラジルを代表するインペーリオ・セハーノの面々。 Foto: Tyno Cruz

ない日本人音楽ライターたちに紹介されていたが、実は復興商業化した観光地：ラバ地区のプチキンではなく、観光客が来ない郊外地区にあるRenascença Clubeこそがその激震地だった。そして多くの有名アーティストが生まれては巣立って行った。コロナ禍後はメンバーがさらに変化した。巨匠Moacyr Luz率いるSamba do Trabalhadorにはインペーリオの創始者で歴史的な名曲の作者として有名なSilas de Oliveiraの孫、Junior de Oliveiraがメンバーとして活躍している。彼と長年共演しているが、モアシールを直接紹介してくれたのは、初期のメンバーで、インペーリオ・セハーノで若い頃に共に演奏したThiaguinho da Serrinhaだった。

Serrinha：セヒーニャとは、リオで唯一、サンバのルーツであるウンピガーダの一つ「Jongo」が一度も途絶えることない伝統で知られるImpério Serranoの本拠地Morro da Serrinhaの事だ。チアギーニョはその名に冠される様にJongo da Serrinha生え抜きのインペーリオである。

Seu Jorgeの片腕として頭角を表したPretinho da Serrinha、Serrinhaで学んだアーティストの一人、Rodrigo Maranhãoの片腕Fofão da Serrinhaほか、皆、演奏を長年して来た仲間達だ。今年のMarisa Monteの公演にメンバーとして来日したPedrinho da Serrinha、10月に公演来日したArlindinhoの父親Arlindo Cruz他、歴代多数のインペーリオたちがブラジル音楽を支えてきている。

“Serrinha”といえば、「ブラジルの音楽とは何か？」を網羅・体現した金字塔的存在Clara Nunesのキャリア絶頂期の名盤「Nação」（東芝EMIより1982年に日本盤がリリース）にも同名曲が収録され、インペーリオ・セハーノの本拠地あり、自身が通いJongoを学んだ場所として、オマージュされている。

メンバー募集中：ブラジルに限らないが、リズムの意味と歴史、ルーツを知ると、その意味合いや背景のダイナミクスが圧倒的に見えてくる。そして行為の意味や精神性も見えてくる。それがサンバの様に、世界各地にリズムのルーツを持ち、ブラジルと各ルーツを多重レイヤーでグラデーションする複雑なリズムであるほど、意味合いを知る必要がある。

ブラジルを代表する名曲や名手たちを輩出して来たインペーリオ・セハーノに所属し、カルナヴァルで長年活動するだけでなく、選抜シヨウメンバーとしての活動を経て、外国人初の公式指導者に認定された事は、ブラジル最大手のTV GLOBOの番組やO GLOBO紙でもご紹介をいただき、私の特集番組や有名映画監督による単独ドキュメンタリーも制作された。しかし、未だに学び、修練する事は山ほどあり、興味は深まり、探究と習得、そして実用と再構成への道は半ばだ。活動と同時に、日本のマスコミ、様々な著名メディア、書籍、イベント、ワークショップ、展示、教育機関での指導、そして自家インペーリオ・セハーノ正式暖簾分けの「Império Serrano Japão」としても、「一次情報」によるフィードバックを多数して来た。現在、横浜市鶴見区でサンバを中心にそのルーツである各リズム、ブラジル史・ポルトガル語なども交えた打楽器のレクチャーを行なっている。

今回は、ブラジルのリズムレクチャーについて。今年のインペーリオ・セハーノでの活動、日本での制作成果、今年2度目の34回の渡伯活動などをレポートしたい。



先生ケイタ☆ブラジル KTa☆brasil

▲サンバ・ド・トラバリアードルの様子。 Foto: Tyno Cruz

本物を本場で、その実態を確かめずには、ブラジル自体もポルトガル語も知らずに、日本で自分勝手にブラジルに憧れ、謳っていても、それは単なる個人的妄想で、現実のブラジルでは無い。だから本場（ブラジル）で実際にトコトコやる必要がある、行かねばならないと高校時代に決意。その後は本場で活動し、本物に長年関わるだけでなく、それは評価され、知られる成果、実績、ブラジルへの貢献となるのか？ ブラジル人でもないのに、ブラジルや第三国で評価されるくらいやらずに、ブラジルをどう表す事ができるのか？ と思い、結果的にブラジルで、日本で、そして様々な世界各

慶應義塾大学国際医学研究会 第47次派遣団が体験したブラジル

阪埜裕理（慶應義塾大学医学部6年生）

私は慶應義塾大学医学部の6年生で、国際医学研究会という慶應義塾大学の公認学生団体に所属している。1978年に設立され、以降医学部6年生の有志3名を夏休みにブラジルへ派遣し続けており、私は第47次派遣団の学生責任者を務めた。昨年度に引き続き岸和田さんよりお話を頂戴し、ブラジルでの経験について執筆させていただく。このような雑誌に寄稿するのは初めてだが、少しでも多くの皆様に楽しんでいただければ幸いである。

派遣団は毎年3名の医学部6年生と慶應義塾大学病院の医師により構成されている。本年度派遣団は阪埜裕理（学生責任者）、藤塚晴紀（会計）、原田沙也加（渉外）、そして慶應義塾大学医学部一般消化器外科の長谷川康先生、以上4名であり、全員にとって初めてのブラジルであった。

アクシデントを経て 無事ブラジル到着

30時間にも及ぶフライトの末に空港に着くと、本研究会の設立当初より私たちを支えてくださっているホストファミリーである肥田家の皆さまがお迎えに来てくださっていた。かつて慶應義塾大学病院で研修をしていた日系ブラジル人医師である肥田ミルトン正人先生、奥様の文子さんのご尽力により46年前に始まった私たちの活動を、現在ご家族の皆様全員で支えてくださっているのである。ブラジルへ向かう途中、急遽ウガン

ダに緊急着陸し2時間ほど機内で待機させられるアクシデントに見舞われ、不安な気持ちを抱えながら空港に到着した我々であったが、肥田家の皆様が大変温かく出迎えてくださり、そのような気持ちが一瞬にして吹き飛んだことをよく覚えている。

アマゾナス州パリンチンスへ

私たち国際医学研究会は僻地医療などを通じて医の原点を実体験することを目的としており、その活動は多岐にわたる。最初に向かったのは、アマゾナス州の第二の都市パリンチンスであった。こちらでは、本研究会が長年継続して行ってきた活動の一つであるアマゾン川巡回診療船同乗実習をさせていただいた。アマゾン川流域のコミュニティには医療資源や医師などが不足している地域が数多く存在し、そちらの村々に船を用いて巡回し医療を提供するプログラムである。私たち自身、初めて訪れたブラジルでの最初の活動であり、緊張と不安を抱えながら船に乗船したものと一緒に乗船した診療船のメンバーが私共を非常に温かく迎え入れてくださり、ブラジルの方々の国民性に変感を受けると同時に文化や言語がたとえ違っても心の交流ができることを強く実感した。本診療船では3つのコミュニティを巡回し、専門性の高いものではなく主にプライマリケアなど基本的な医療サービスの提供を行い、緊急度や重症度の高い疾患や精密検査などは街へ送り治療を行うというシステムであった。このような基本的な医療を提供する診療船でさえ4ヶ月に一回しかコミュニティに伺うことができないというお話聞き、住民にとっては大変貴重な医療機会であると感じると同時に、その居住環境の困難さや

日本にいると考える機会の少ない環境というものの重要性を考えさせられる日々であった。また、実際に住われている住民の方々はやはり疾患の知識などが十分でなく、高血圧など毎日薬を服用すべき疾患を抱えながらも、自覚症状がないがゆえに薬を服用しないケースが少なくなかった。そんな現状を目の当たりにし、単なる疾患治療だけでなく、病気に対する理解を深め、適切な服薬を促すための教育の重要性を改めて認識する活動であった。

ペルナンブーコ州の 先住民訪問

パリンチンスでの活動を終え、次に向かったのはレシーフェであった。レシーフェではペルナンブーコ州ベスケイラに住むシュクルス族という先住民の村を訪問し、伝統医療についてお話を伺



▲先住民集落訪問

た。シュクルス族は農耕を中心とした伝統的な生活様式を維持している先住民であり、自然崇拝や宗教的儀式を通じて独自の文化を守り続けている。その中で、バジェと呼ばれる霊的指導者が自然からの魂を受け取り、その魂を用いて患者を治すものとされている。しかしその一方で、バジェに治すことができない患者さんに対しては医師に治療を任せるといった判断もしており、その時代ごとの環境や価値観に適応した形で伝統を継承し守り続ける姿に大変感銘を受けた。このような伝統医療は日本ではほとんど見られないものである一方で、人々が他の



▲左から長谷川先生、中原先生、阪埜、藤塚、原田

人々を想い、どうにかして救おうと奔走する姿はそれこそが医の原点であり、その想いこそが今後医療者として社会に出る上で、常に忘れてはいけないものでありと実感することができた。

首都ブラジリアへ

レシーフェの後はブラジルの首都であるブラジリアへと向かった。ブラジリアではこれまでの活動とうって変わって、日本でさえも用いられていないような最先端の医療機器を使用している眼科病院の見学や、ブラジルの国会議事堂であるPalácio do Congresso Nacionalの訪問を行った。これらの場所では、本当にここまで見てきたブラジルと同じであるのかと目を疑うような先進的な一面を見ることができた。同じ国内においてもここまでの差異があることに驚愕し、その分貧富の差なども大きく存在することは想像に難くなかった。社会貢献を行う上では広い視野を持ち、世の中の様々な側面に目を向けながら取り組んでいくことの重要性を学んだ。

サンパウロの医療現場へ

その後はサンパウロへと戻り、公立病院や私立病院など異なった種類の病院見学や、現地大学での医学生との会議などを主に活動を行った。ブラジルには無料で全ての医療を受けることができる保険診療を行う公立病院と自費診療を行う私立病院の二つが存在する。無料で医療を受けられると聞くととても聞こえはいいが、州によってはこの保険診療がパンクしてしまっている地域があり、実際に疾患を患ったとしても診察してもらえないのが1年後というようなことも珍しく

ない。また実際に提供される医療の質や病院の設備の豊かさも公立病院と私立病院では雲泥の差があり、全ての患者を平等に扱うわけではなく、お金を支払えば支払うほどより良い医療を享受できると

いう価値観が全ての国民に受け入れられていた。このような考え方を理解しつづけていってしまうような現在の日本の国民皆保険制度がどれだけ恵まれているかを再認識するきっかけとなった。またそれと同時に、現在の逼迫する財政状況と少子高齢化が進む日本において今後どのように制度を改革していくべきであるかを考える上で大変貴重なロールモデルであると考えられ、これからの日本の保険医療を担う我々にとって大変貴重な学びとなるものであった。

また、私たちはブラジル最高峰の大学であるサンパウロ大学や、サンパウロ州立パウリスタ大学において、日本の医療についてポルトガル語で発表を行うため、ブラジル渡航準備中の約1年間ポルトガル語を勉強しており、実際にその成果を発表する場を設けていただいた。日本では他国の言語を使うことはおろか、大勢の前で発表を行う機会すら乏しいため団員3名とも大変緊張の面持ちであったが、無事勉強の成果を発揮することができ、現地の先生方や学生からお褒めの言葉をいただいた。その時は率直に心から嬉しく、改めて現地の方々の母国語を使うことがどれだけ心の距離を縮める上で重要であるかを実感した。今後グローバル化の一途を辿る医療の領域における言語の役割の大きさを肌で体感することができ、とても貴重な経験であったと感じている。

加えて、現地の私たちと同じ年代の医学生たちは言語が流暢であるだけでなく、問診や採血、救急外来での初期対応など様々な基礎的な医療行為を難なくこなすことができる。これは実習の段階から様々な練習

の機会を与えられているからであり、これには現地の医療制度が大きく関係している。日本においては医学部を卒業しただけでは医師となることはできず、医師国家試験に合格して初めて医師免許を取得することができ、更にその後2年間の初期臨床研修を終えた時点で専門を決め立ち上げる仕組みとなっている。一方のブラジルは、医学部を卒業した時点で自動的に免許が与えられ、かつ専門も決めなければならない、そういった面で日本より時間が限られているのである。更に、ブラジルは上述のように保険診療と自由診療が存在し、特に保険診療においては人手が足りていない現状があるため、そういった機会を利用して経験を積むシステムとなっている。自分と同年代の医学生がすでにここまで独立して医療を提供することができるという事実を目の当たりにしたことは、来年から研修医として研鑽を積んでいく我々にとって大変刺激的であり、今後に向け大きなモチベーションとなった。

こうして約4週間に渡るブラジルの旅が終わった。まだ何も医療行為を行うことができないような学生という身分の中で、医療というテーマを通じて地球の反対側まで送り出していただき、大変多くのことを学ぶことができたと感じている。また、どんな環境であってもその場に適した形で医療に貢献されている方々を拝見し、これまでの自分の視野の狭さを痛感した。学生最後の夏休みに経験させていただいたことを糧として、どのような状況においても熱い志を持ち、一歩努力し、医療に幅広く貢献できる医師になることを目指して頑張っていきたい。興味を持ってくださった方は、是非本研究会HPより、第47次派遣団活動プログラムをご覧ください。最後に、私たちの活動を支えてくださった全ての皆様方にこの場を借りて御礼申し上げます。



▲サンパウロ大学での医学生会議

▲アマゾン川巡回診療船の皆様と



ブラジル最大の酪農産地とオランダ移民の底力



山本綾子
〔「ブラジル・カルチャー図鑑」
編著者、クリチバ在住〕

Batavo の少女とブラジル酪農事情

ブラジル在住経験者なら、スーパーで売られるヨーグルトやバターの商品パッケージに描かれた三角帽子に三つ編み姿の少女に見覚えがあるだろう。今年、創業 96 年を迎える Batavo ブランドは、パラナ州カランベイ市で生まれ、現在はフランスの世界最大乳業メーカー、Lactalis 社の傘下に入っているが、この少女のロゴは変わらず不動の人気を誇っている。クリチバから約 140km 北西、人口約 2.3 万人のカランベイは、1911 年にオランダ移民が初めて正式に入植した地で、この少女の装いこそオランダ本国の民族衣装だ。

カランベイに移住したオランダ移民は本国から連れてきた牛とともに酪農をはじめ、1925 年にはブラジルで 2 番目の農業協同組合「オランダ酪農協同組合」を立ち上げている。数年後に Batavo ブランドを生み出した母体であり、現在、酪農以外のアグリビジネスも幅広く手掛ける「フリジア農業協同組合」の前身でもある。

ご存じの通り、ブラジルは牛肉、大豆、トウモロコシ、オレンジなど世界最大級の生産量を記録する農業大国であるが、酪農ビジネスも盛んで、生乳生産国としては世界第三位を誇る。そして、その酪農ビジネスの歴史に最も寄与したのがオランダ移民なのである。

中南米最大の酪農ビジネス展示会「アグロレイチ」

カランベイから約 30 キロ、人口約 7.3 万人のカストロ町の町はずれに「カストロランダ」という地区がある。ここもまたオランダ移民によって開拓された地で、昨今は、毎年 1 回、中南米最大の酪農展示会「アグロレイチ」の開催場所として注目されている。

展示会場のエキスポセンターは、オランダ風の建築群とドーム屋根の巨大パビリオンが聳える広大なスペースで、今年は 8 月 6～9 日に開催された。開会式でピアノ・パラナ州副知事は、同展示会には前年度 2 割増の 330 社が出展し、牛、豚、羊など合計 580 頭が展示され、最大 15 万人の来場が見込まれているとした上で、パラナ州はブラジル有数の酪農地帯であり、一位になる日も遠くないと勢いよく述べた。展示会にはブラジルだけでなく南米各国の酪農関係者が集まり、牛乳の生産増や生産性向上、育種改良やアニマルウェルフェアなどに関する技術や製品の展示のほか、パネルディスカッションやセミナーが開催された。

展示会の目玉イベントは牛の品評会で、各地から連れてこられた牛がパビリオ

ン内のステージで披露される。ここで出品される最高峰の品種とされるのが、お馴染みの白地に黒の模様美しいホルスタイン種で、オランダ移民が本国から持ち込んだ寒冷地に強い牛だ。かつては南米大陸には存在しない品種であったが、今ではブラジル南部の酪農場の景色に溶け込んでいる。

観光地からみるオランダ移民の底力

ブラジルにおけるオランダ村といえ、サンパウロ州にある通称、花の街「オランブラ」が有名。また、オランダとの縁といえば、植民地時代の 17 世紀前半にさかのぼり、オランダに一時期占領されていた北東部オランダやレシフェなどにもオランダ文化を感じる街並みが残っている。一方、パラナ州のオランダ村は旅行目的としては非常にアクセスしにくい難点があり、知られた存在からは程遠いといえる。

クリチバ在住の筆者はカストロランダとカランベイを訪れたところ、いずれも辿り着くまでの行程は容易でないが（クリチバから高速道路で片道 2.5～3 時間）、特にカランベイにある、ブラジル最大級の野外博物館といわれるカランベイ歴史公園の施設と展示は期待をはるかに超える見応えがあった。移住 100 周年を記念して 2011 年設立というまだ新しい施設ということもあり、整備された空間は非常に美しい。10 万平米の敷地にかつてのチーズ製造工場、牛舎、学校、教会などの建物が復元され、それぞれ解説と共に移民の歴史が丁寧に紹介されているほか、閘門、防波堤、港湾、水上住宅などオランダが持つ水管理技術を見せている。訪問当日、筆者は閉館 1 時間前に、本国アムステル川に架かる「マヘレの跳ね橋」を模した小さな吊り橋を渡って入場したが、広大な敷地は展示物が満載かつ写真映えするスポットの連続で、閉館時間の 18 時ギリギリに小走りに戻った。時わずかにして出入口となる跳ね橋は上げられ、そのまま閉館となった。取り残された来場者はいないか気になりつつ、橋を渡るとまるでオランダ旅行から帰ってきたような錯覚を覚えた。

野外博物館から一歩足を延ばすと、もう一つの観光スポットがある。オランダ発の種苗会社 Kieft Seeds 社が整備したまるで絵葉書に飛び込んだようなラベンダー畑だ。いずれも相当な資金が必要であることが想像でき、決して数は多くないブラジルにおけるオランダ移民の底力を感じるものだった。



▲翼幅 26 m の巨大風車「カストロランダ」筆者撮影



▲オランダ初期移民の像（カランベイ歴史公園）筆者撮影

新刊書紹介



◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆

『比較教育学研究 66』 （日本比較教育学会編）

今号の特集として、コロナ禍における各国の教育現場での教員たちの経験についての諸論者が収録されている。米国、オランダ、オーストラリアの事例研究に次いで、山口アンナ真美（教育学博士、北海道教育大学講師）による論文「ブラジルにおける教員の『新たな』職務—コロナ禍で見えてきた教員の社会的貢献」は、世界で二番目のコロナ感染死者数を記録したブラジルにおけるコロナ禍と苦闘した教員たちの経験を詳細に論じている。

（東信堂 2023年3月 296頁 税込み2,200円）

『地球上の中華料理店をめぐる冒険』 （チョック・クワン著、斎藤栄一郎訳）

NY タイムズが絶賛した、世界中に広がる中華料理についての歴史ドキュメンタリー風ルポ作品。著者は香港出

身の中国系カナダ人映像作家。米大陸からアフリカ諸国までカバーしており、南米はハバナ、サンパウロ、マナウスなど 5 事例を掲載。サンパウロの事例は、不法移民の屋台からレストラン 6 店舗の経営者となった経緯が書かれ、マナウスは台湾移民が創意工夫して現地食材を活用したアマゾン風中華料理を開発と、創造的面白さの本だ。

（講談社 2024年6月 444頁 2,000円+税）

『奴隷制廃止の世紀』 （マルセルドリーニ著山田美美 / 山木周重訳）

奴隷蜂起によって 1793 年に奴隷制廃止となったサン・ドマング（現ハイチ）の事例を中心に、世界における奴隷制廃止の様々なプロセス（1793 年～1888 年）を史料に基づき叙述している。世界で最後に奴隷制を廃止したブラジルについても略述されているが人名の初歩的な誤記（ホアキン⇒ジョアキン、ホセ⇒ジョゼなど）についてはお粗末というしかない。翻訳者（編集者も）のプロ意識の欠如を感じてしまう。折角の良書なのに、残念。

（白水社文庫クセジュ 2024年4月 160頁 1,400円+税）

『世界の料理 365 日』 （青木ゆり子著）

群馬でマンジオリカ掘りを体験した

ことのある郷土料理研究家による、「見て、読んで楽しむ」世界の料理案内エッセイ本。1 ページ毎に世界各地の郷土料理について実体験に基づくミニ解説が記述されている。ブラジルからは、キャッサバ、ブラジル版ホットドッグ「カショーホ・ケンチ」、パラチのカシャッサ祭り、バイアのマンジャーラ・ブランコ（ココナッツ・プリン）、リオのシュラスコ、と五つもエントリー。読んで楽しい一冊。

（自由国民社 2024年8月 384頁 1,800円+税）

『砂糖と人類 2000 年全史』 （ウルボ・ボスマ著、吉嶺英美訳）

名著『甘さと権力』のシドニー・ミンツ教授からのアドバイス「大西洋を中心に書かれてきた砂糖の歴史にアジアの製糖の歴史を加えるべし」に従ったオランダ人研究者による歴史研究の成果が本書。アジアから西に向かった砂糖の世界は、黒人奴隷制に基づいて急速に拡大したが、科学と蒸気機関の登場で砂糖資本主義のレベルが急上昇し、並行して環境破壊から過剰摂取による健康被害まで引き起こす。分厚い研究書だが熟読する価値あり。

（河出書房新社 2024年9月 516頁 3,900円+税）

キャンパス・コラム

ブラジルに魅了されて

有馬 倅（東京外国語大学）

私は、東京外国語大学でポルトガル語を専攻している。大学の特色のひとつとして留学生が多くいることが挙げられるが、ブラジルからの留学生も在籍しており、私はこれまでそのうち 20 名ほどのブラジル人と交流してきた。授業でブラジル人留学生と関わることはほとんどないが、学食で共に昼食をとったり遊びに行ったりすることで仲を深めているので、日本にいながら、いつでもブラジル人と会話できる環境で大学生活を送ることができている。彼らは、誰に対してもオープンで優しく、思いやりがある。私の拙いポルトガル語を理解しようとする姿勢には感謝するばかりである。

私のブラジルやブラジル人とのつながりは大学だけにとどまらない。例えば「一般社団法人光 JS みらい」も私とブラジルを結びつけてくれる重要な存在だ。現在この団体で学生スタッフとして活動しているが、そのきっかけは偶然の巡り合わせだった。ある日、ブラジル人留学生と一緒に昼食をとるためにブラジル料理店を訪れたところ、ちょうど「光 JS みらい」が主催する「Café Bate-papo（カフェバチパポ）」というイベントが開催されていた。状況もよく分からないままイベントに参加し、初対面の方々とポルトガル語での会話

を楽しんだ。この時は参加者という立場に過ぎなかったのだが、この出会いがきっかけとなりその後まさかこのイベントのファシリテーターになるとは思ってもみなかった。

「光 JS みらい」では、ブラジルに関連するイベントの企画や運営にも携わっているが、それまでブラジルに馴染みのなかった私にとって、活動を通して出会う人から聞くブラジル特有の文化や現地での生活の話は魅力的で、その奥深さにますます魅了されるようになった。さらに、活動を通じて日本にいるブラジル人とも多く知り合い、彼らの才能や勤勉さ、人間性の素晴らしさに感化されながら、ポルトガル語の学習に対するモチベーションも一層高まっている。

そんな素敵なブラジル人やブラジル好きの方々と共に数々のブラジルに関連したイベントを作り上げている。現在構想しているのが、11 月 24 日東京都の小岩駅周辺で開催予定の「BRAZIL QUEST（ブラジルクエスト）」というイベントである。ブラジル料理や音楽、クイズなどブラジルらしさが盛りだくさんのイベントなので、今この文章を読んでくださっている方々にもぜひ遊びに来ていただきたいと思う。

ブラジルにおける「ビジネスと人権」に関する取組みの現状



柏 健吾
(TMI 総合法律事務所
日本法弁護士現在ブラジルで勤務)

1. はじめに

近年、企業活動が社会にもたらす負の影響について国際的な関心が高まっており、2011年には国連人権理事会で「ビジネスと人権に関する指導原則」が合意された。日本政府も、2020年に「ビジネスと人権」に関する行動計画を策定した。この中では人権デューデリジェンスの必要性にも言及されており、日本では各業界団体なども人権に関する取組みを推進している。

ブラジルにおいても、同テーマに対する関心が徐々に高まっているため、本稿では、同テーマに関するブラジルにおける現時点の状況を具体的な事例を紹介しつつ解説する。

2. 既存の法律

ビジネスと人権という観点では、奴隷労働、人身売買及び児童労働は憲法又は法律においてすでに禁止されている。また、近年のビジネスと人権というテーマは、自社の事業活動による人権侵害だけではなく、下請企業やサプライヤーによる人権侵害も含む形で議論・法制化されている。この観点で言えば、ブラジルにおいては、労働法上、自社業務を下請企業に委託した場合、当該下請企業の従業員の労働債務について発注者が責任を負うため、労働債務についてはすでに一定程度カバーされている。

ただし、下請企業やサプライヤーによる人権侵害を防止するためのデューデリジェンスの実施義務や人権侵害が生じた場合の発注者などの第三者による補償義務を規定する法律は存在しない。

3. 人権とビジネスに関する国家基本法案

2022年3月、人権に関する公共政策を推進するための基本方針を定める人権とビジネスに関する国家基本法という法案(Lei Marco Nacional sobre Direitos Humanos e Empresas: Projeto de Lei nº 572/2022)が国会に提出された。本法案に関する議論はまだ初期段階にあるため、実際に法制化されるとしても内容が大きく修正される可能性があるが、ビジネスと人権に関してブラジルでどのような議論が現在行われているか、また、今後どのような義務が制定され得るかの参考として、本法案の概要を紹介する。

(1) 基本原則

基本原則として、以下の9つの原則を規定する。

- ①人権の普遍性、不可分性、不可侵性、相互依存性
- ②国家による人権の尊重、保護、保障
- ③人権に関するルールがあらゆる協定(経済、貿易、サービス、投資などに関する協定を含む)に優先する
- ④企業による人権侵害に対して被害者や地域社会が完全な補償を受ける権利
- ⑤影響を受ける人が、事前の、自由で、十分な情報に基づいた誠

実な協議を受ける権利と同意を行う権利の確保

- ⑥人権に関するルール間に矛盾がある場合、影響を受ける人に最も有利なルールが優先される
- ⑦人権に関するあるルールに複数の解釈がある場合、影響を受ける人に最も有利な解釈が優先される
- ⑧本法に定めるルールの実施、監視、定期的評価
- ⑨人権侵害の影響を受ける人や地域社会、労働者、市民、団体、社会運動並びにそれらのネットワークや組織の不起訴

(2) 企業の義務

企業の義務として以下を規定する。

- ①人権侵害の特定、防止、管理及び是正するためのデューデリジェンスの実施
- ②予防、監視、救済システム(6か月ごとの人権報告書の作成、損害賠償が完了するまでの企業による基金の創設など)
- ③企業活動における人権の促進、尊重及び確保(児童労働や強制労働を禁止する国内外のルール、1989年の原住民及び種族民条約の尊重、人権尊重に関する企業の体制や方針の公表、事前かつ十分な事前の情報提供に基づく影響を受ける人々との協議及び同意の取得など)

(3) 連帯責任

サプライチェーンに含まれるすべての企業が人権侵害について連帯責任を負うことが規定され、これには、支配企業、被支配企業、投資家、下請業者、当該ビジネスに投資を行い又は当該ビジネスから利益を得ている国内外の金融機関が含まれ、また、直接的な契約の有無は問わない。

(4) 個人やコミュニティの保護

影響を受ける個人やコミュニティの保護を目的として、立証責任の転換の可能性、企業との交渉における社会的弱者への支援(公選弁護人による支援など)、司法手続への無料アクセス、原住民などの影響を受ける人々が、事前の、自由で、十分な情報に基づいた誠実な協議を受ける権利と同意を行う権利の確保が規定されている。

4. 実際の事例

ビジネスと人権の観点で最近ブラジルで問題となった事例をいくつか紹介する。

- ①2024年2月、ワイナリーがブドウの収穫を外部業者に委託していたところ、受託会社の労働者が奴隷のような待遇で働かされていることが発覚した。
- ②RSPO(持続可能なパーム油のための円卓会議)が、2023年3月、先住民が有する土地を侵害している可能性があることを理由にブラジルで唯一RSPO認証を有しているAgropalma社の認証を一時停止した。
- ③食肉メーカーであるJBSが、2024年2月、ニューヨーク州司法省から、グリーンウォッシング(環境配慮をしているように装うこと)を理由に提訴された。

ブラジルの給与平等法：より公平な未来に向けた進展と課題



天野義仁
(KPMG ブラジル
ジャパンデスク
責任者)



佐々木健文
(KPMG ブラジル
ジャパンデスク
マネージャー)



Valter Shimidu
(KPMG ブラジル
パートナー)

男女間の給与平等は、ジェンダー平等や労働権に関する議論の中心的なテーマです。ブラジルでは、1988年の連邦憲法で男女の権利の平等が保証されましたが、実態としては給与格差が存在しています。このため、平等な給与を促進するための法律制定や公共政策が実施されています。本記事では、ブラジルにおける給与平等法の軌跡、その主要な課題、そして将来への展望を考察します。

給与平等に関する主な法的規定

ブラジルにおける給与平等は、複数の法律や規制によって規定されています。

1. **労働法典 (CLT)**: 性別、年齢、肌の色、婚姻状況に基づく給与、職務、または採用基準の区別がないことを強調しています。
2. **1988年連邦憲法**: 男性と女性が同等の価値のある仕事に対して同等の給与を受け取る権利があることを定めています。
3. **法第 14,457 号 /2022**: 給与の透明性を向上させるための措置を定めており、100人以上の従業員を持つ企業に対して、従業員の給与データを性別、人種、その他の関連基準に分けて半年ごとに報告することを義務付けています。

給与平等法に準拠するために企業が行うべきこと

ブラジルの給与平等に関する現行法に準拠するため、企業は以下の行動を遵守する必要があります。

1. **給与と透明性報告の公開**: 法第 14,457 号 /2022 に基づき、100人以上の従業員を持つ企業は、従業員の給与を性別、人種、その他の関連基準に分けて半年ごとの報告書を公開する必要があります。
2. **公正な報酬政策の実施**: 企業は、CLT に従い、同等の価値のある仕事に対して男女が同等の給与を受け取ることを保証する明確な政策を確立しなければなりません。これらの政策は、従業員に明確に伝えられ、採用、昇進、及び業績評価のプロセスに組み込まれるべきです。
3. **定期的な内部監査**: 内部給与監査を実施し、給与の不均衡を特定し、必要に応じて是正措置を講じます。
4. **トレーニングと認識向上**: 職場におけるジェンダー平等及び非差別に関するトレーニングやワークショップを実施します。管理職及び従業員の認識を高めることは、給与格差に寄与する差別的な慣行を防ぐために不可欠です。
5. **匿名報告システムの強化**: 従業員が差別的慣行や給与格差を報告するために、企業は安全で匿名のチャネルを設けます。

給与平等基準に違反した場合の罰則等

給与平等基準に違反した場合、企業には以下のようなさまざまな罰則等が科される可能性があります。

1. **行政罰**: 給与平等基準に従わない企業は、違反の重大さや企業の規模に応じて罰金が科されることがあります。
2. **訴訟及び賠償**: 給与に関して差別を受けたと感じた従業員は、雇用主を相手取って訴訟を起こすことができます。裁判所は企業に対して、精神的及び物質的な損害に対する多額の賠償を命じることがあります。
3. **労働省労働検察庁 (MPT) の介入**: MPT は給与差別の事例に介入し、企業に対してその慣行を修正し、法令を遵守するよう要求することができます。
4. **レピュテーションリスク**: 給与平等基準に違反することは、企業の評判にダメージを与える可能性があります。特に企業の社会的責任に対する関心が高まる市場においては、このことが顧客、パートナー、及び人材の喪失につながる可能性があります。

法律では給与平等が規定されているものの、企業が法令を遵守していることを保証するためのメカニズムはほとんどありません。そもそも給与報告書を公開している企業はわずかであり、さらに給与差別の事例のうち罰金や制裁が科されるのは15%と実効性が低い状況にあります。

ブラジルにおける給与平等の現状と課題

ブラジルの男女給与平等の実態は理想からほど遠いことが明らかになっています。ブラジル地理統計研究所が2022年に実施した調査によると、女性は同じ職位で同じ資格を持っている場合でも、平均して男性より給与が22%低くなっています。女性の60%が給与水準が低いとされるサービスセクターに従事しています。一方で、管理職や取締役職に就いている女性はわずか20%となっています。最初の子供を持った後、女性が昇進する確率は30%減少するという研究結果もあります。これらのデータは、ブラジルが先進国と比べて遅れを取っていることを示しています。

黒人や先住民の女性にとってさらに困難な状況です。彼女たちは性別と人種に基づく二重の差別に直面しています。2023年にはブラジルの黒人女性の収入は白人男性と比べて44%低いことが報告されています。これは、ジェンダーを超えて、人種や社会階級をも包含する不平等を反映しています。

ブラジルにおける将来の展望

男女間の給与格差を解消することは、ブラジル経済全体の成長、企業競争力の向上、教育、健康を含めた国民の生活の質の向上につながります。法律や各種政策の実効性の向上に加え、企業による透明性報告、監査の実施、政府によるインセンティブ付与、企業による多様性・ジェンダー平等を重視する組織文化の育成、これらを組み合わせた包括的なアプローチを採用することで、ブラジルは給与平等において大きな進展を遂げることができるでしょう。

ブラジルに響く、日本の歌



中里春奈
(研修コーディネーター)

私は驚いた。一人の若いブラジル人女性が壇上に上がったかと思うと、流暢な日本語で『残酷な天使のテーゼ』を熱唱し始めたのだ。

これは、去る7月12日～14日にサンパウロで開催された日本祭りのできごとである。私はその日、翌日にメインステージにてパフォーマンスを行う予定だった歌手・ZENKYU氏のアシスタントとしてリハーサルに同行していた。

リハーサルが無事終わり、会場内を散策していた時だった。とあるブースでカラオケコーナーが開催されており、希望者が好きな曲を申告して順番に歌っていた。そこで耳に飛び込んできたのが前述の『残酷な天使のテーゼ』だ。日本語の歌を流暢に歌う彼女もさることながら、もっと驚いたのは、近くにいた人々が集まりだし聴き入っていたことである。彼らの内、どれくらいの人が日本語の歌詞を理解しているのだろうか？ などと素朴な疑問が浮かんだが、そんな疑問が浮かぶ程度には耳目を集めていた。

話は変わり、翌日のZENKYU氏のステージに移る。約15分ほどの間に2曲オリジナル楽曲を披露したZENKYU氏だったが、そこでも私は再び驚かされることになる。

それは、2曲目の『百と十六年の轍』という日本語で書かれた楽曲だった。戦後すぐアマゾンに入植したとある日本人女性の体験談を基に、日系移民の思いを歌い上げた氏のオリジナル楽曲だったが、歌い終えた時、1曲目のポルトガル語の楽曲よりも拍手が大きかった気がしたのだ。

もちろん、ZENKYU氏のパフォーマンスが素晴らしいのは言うまでもない。だが、会場にいる人は日系の人々だけではない。むしろ日本語の歌詞など分からない人のほうが多いはずだ。それにも関わらず、こんなにもたくさんの人がじっと聴き入り、心を動かされている…私は、ブラジルに響く日本の歌の力を目の当たりにし、大変な衝撃を受けたのだ。

実は、この度初めてブラジルに足を踏み入れた私にとって、人々とのコミュニケーションはなかなか難易度が高かった。というのも、諸外国の例に漏れず、ブラジルの人々も顔立ちでルーツを判断することがほぼ不可能なのだ。

大学時代に専攻していたスペイン語ではほとんど太刀打ちできず、英語と挨拶程度のポルトガル語でなんとかやり過ごす日々。そんな中で、『およそ日本人ではない外見の方が流暢に日本語で話す』、あるいは『日本人と言われて全く疑わない外見（時に名前も）の方が実は全く日本語を話せない』という状況は大いに私を混乱させた。

私は東京外国語大学に在学中、メキシコで8か月程インターンをさせていただいたことがあるのだが、メキシコではこのような戸惑いはあまり感じたことがなかったように思う。

改めて調べてみると、ブラジルへの移民は1908年に笠戸丸で渡った781名に始まり、第二次世界大戦を経て今日までに約24万人（戦前18万、戦後6万）に上る。（『ブラジル日系移民史料館ガイド』より）

一方、メキシコへの移民開始はブラジルより少し早い1897

年であるものの、35名という少ない人数であり、2016年の時点でも日系人全体、つまり日系1世とその子孫を併せて2万人となっている。（『あかね 在メキシコ日系移民・春日光子とその短歌』より）

ラテンアメリカという同じくくりで語られる両国だが、ブラジルの方が圧倒的に日系社会の規模は大きかったのである。知っているつもりでも、実際に現地を歩いてみて初めて実感として理解できることは多い。今回の経験もまさしくそれであった。

とある年配の日系2世の方がおっしゃっていた。『最近5世、6世と世代が下り、自分が日系であることをあまり意識していない人も増えた。日本語や日本でのルーツに興味を持つ人も少なくなっている。』と。それは自然なことだ、と彼は続けたが、少し寂しそうなその顔がなぜか強く印象に残っている。

現在私は『棟名さと』名義で俳優・ポर्टレートモデルとしても活動しており、中でも戦前の人々の史料を訪ね、その姿を現代に復刻する活動に力を入れている。そんな私にとって、今回の日伯の歴史に思いを馳せる旅は非常に貴重な経験となった。

ブラジルでご縁をいただいた皆様に心より感謝申し上げ、今後の活動の糧としていきたい。



▲ブラジルへ東山農場にて



浜松城がブラジルカラーに染まる 多文化共生を象徴する一夜

文責：在浜松ブラジル総領事館、J1株式会社

浜松城ライトアップ～ブラジルカラーに

9月7日、浜松城がブラジルカラーにライトアップされた。この日はブラジルの独立記念日であり、在浜松ブラジル総領事館が主催するイベント「ブラジルナショナルデー」の一環として、初めて行われた取り組みである。浜松市のシンボルである浜松城が、ブラジル国旗の象徴である緑と黄色で彩られた。

ライトアップの点灯式には、浜松市長の中野祐介氏、湖西市市長の影山剛士氏をはじめ、県内外の行政関係者や企業、学校関係者、アーティストらが参加した。浜松城天守閣前広場で、ブラジルと日本の国歌が斉唱される中、たくさんの市民や外国人住民が集まり、ブラジル文化に触れる貴重な機会となった。特に、浜松市内のブラジル人学校に通う子どもたちによる合唱は、この日のハイライトとなり、多くの観客の心を打った。これら子どもたちの多くは、実際にはブラジルを訪れたことがなく、このようなイベントを通じて、彼らの祖国との絆が深まる重要な役割を果たしたと言える。

ブラジルナショナルデー

同日11時から18時にかけては、「ブラジルナショナルデー」のメインイベントが浜松城公園内で開催された。このイベントでは、カポエイラやダンス、ブラジルのポピュラーミュージック（MPB）、フォホー、サンバ、ボサノヴァなど、ブラジルを代表する音楽や文化が披露され、日本人や他国籍の観客にも大いに喜ばれた。特に、ブラジル人学校の子どもたちによるパフォーマンスは、多くの注目を集め、ブラジルの伝統文化が次世代にしっかりと受け継がれていることを強く感じさせた。

また、会場には数多くのキッチンカーが並び、パステル、コシーニャ、シュラスコなど、ブラジルの定番料理が提供された。これにより、浜松の多文化共生を象徴する場となった。ブラジル料理は浜松市内でも人気があり、来場者が列を作る光景が見られた。

このイベントの背後には、浜松市内で存在感を増すブラジル人コミュニティがある。浜松市は、日本国内でも有数の

ブラジル人が居住する都市で、その歴史は1990年代に遡る。バブル崩壊後の日本では、

労働力不足を補うため、多くの外国人労働者が受け入れられ、ブラジルからの労働者は自動車産業や楽器製造業などで大きな役割を果たしてきた。浜松はヤマハやスズキなどの世界的な企業の本拠地であり、これらの企業が積極的に外国人労働者を採用してきたことも、同市が「日本の中のブラジル」と呼ばれる所以である。

浜松城も、イベントの舞台として特別な意味を持つ。もともとこの城は16世紀に築かれ、徳川家康が居城とした歴史的な場所である。家康が城主を務めた17年間、浜松城は徳川幕府の基盤を築く上で重要な役割を果たした。その後、城は戦国時代や江戸時代を通じて多くの変遷を経て、1958年に再建された。現在では、市民や観光客に愛される観光名所として、浜松市の象徴的存在である。

浜松城のライトアップは、ブラジルと日本の交流が深まる中で、特にこの地域に住むブラジル人コミュニティにとって象徴的な出来事となった。ライトアップという視覚的な演出は、地域社会におけるブラジル文化の存在感を際立たせるも

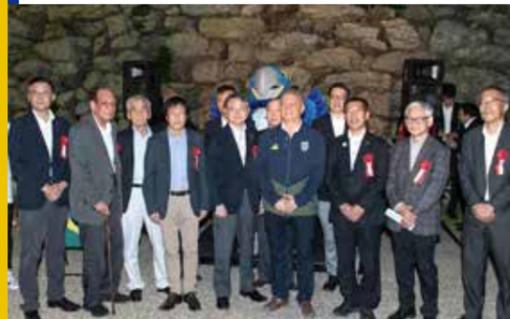
のとなり、両国の文化が共存し、共に祝われるこのようなイベントが、多文化共生を推進する上で今後も重要な役割を果たすことが期待される。



▲ブラジル人学校の生徒による発表の様子
▶ジャンプ・キッズの発表の様子
▼カポエイラ・パラウナの発表の様子



▲キッチンカーの様子



▲浜松城天守閣点灯式典ご来賓記念撮影の様子



Jornal Rasquinho®

ブラジル文学に新境地を切り開いた作家マルシオ・ソウザの死 アマゾン発の小説作品は強烈に面白かった

岸和田仁（『ブラジル特報』編集人）

マナウス在住作家の訃報

8月12日の未明、作家・劇作家マルシオ・ソウザがマナウスで亡くなった。享年78。マナウスで生まれ育ち、大学教育はサンパウロ大学（専攻：社会科学）で受けているが、劇作家、演出家、小説家、ジャーナリストとして活躍したのもマナウスにおいてであった、という文字通り真正正銘のアマゾン文化人であった。彼は州政府の文化財団理事長などの公職にも長年携わっていたこともあって、アマゾナス州政府は、三日間の公式服喪を宣言した。マルシオ・ソウザの小説は筆者も夢中になって読み進んだ経験があるので、私的なメモを重ねてみたい。

1983年3月、サンフランシスコ

既に40年以上前の話になるが、筆者は、所用で米国へ出張した時、サンフランシスコではチャイナタウンで空腹を満たす直前、中華レストラン街の端に小さな書店があったので、衝動的に入ってみた。入口近くのところに平積みされていたペーパーバック（Avon Books）二冊がブラジル文学の英訳版であることに気付き、早速購入し、ホテルに戻ってから読み始めることに。一冊は、ジョルジ・アマード『ガブリエラ、丁字と肉桂』で、もう一冊がマルシオ・ソウザ『アマゾンの皇帝』であったが、このアマゾン小説がやたらと面白く読みながらコーフンしてしまったことがいまだに記憶に残っている。

この時の偶然の出会いから5年後、邦訳版（『アマゾンの皇帝』旦敬介訳、弘文堂、1988年）が刊行されたので、改めて日本語で再読したが、マルシオ・ソウザの小説世界の魅力を再確認することになった。

『アマゾンの皇帝』（原題：ガルベス、アクレの皇帝）とは

邦訳書に付された帯の宣伝文句は、「世界中のすべての革命のなかで最も短く、最も享乐的、最も陽気なジャングルの革命王国をめぐる艶やかな叙事詩 一躍世界の表舞台に登場したベストセラー」というものであったが、このポップ小説は、アクレ独立革命という実際の史実に基づく、パロディーたっぷりフィクション作品である。



▲『アマゾンの皇帝』表紙

まず、この小説のもととなった歴史的事実をざっくり復習しておこう。

アマゾン奥地のアクレ地方（現在はアクレ州）とボリビアとの国境線が最終確定していなかった19世紀末、天然ゴム景気に

沸く同地方にやってきたスペイン人冒険家ガルベスが、権謀術数を弄して「アクレ共和国大統領」に就任（1899年7月14日）したものの、その5か月後（同年12月28日）には失脚、と超短期政権に終わったのが、「アクレ独立革命」であった。このアクレ共和国は1903年までの3年間ほど存在し、独自の郵便切手まで発行したりしたが、なんともドタバタ喜劇の如く生まれ消滅した「独立革命」であった。

本文が始まる前の扉ページに「途方もなく華々しきアマゾンアンの諸都市におけるドン・ルイス・ガルベスの稀に見る冒険ならびにアクレ地方領土の笑激的征服。読者の悦楽のためにここに理性の敵切なる均衡にのっとなって描き出される。」という冒頭メッセージが記されているが、主人公ガルベスの物語の舞台は、ベレンやマラジョ島から始まり、アマゾン河中流域で運航される輸送船だったり、アクレだったり、と広大なアマゾンを動き回りながら、活劇が展開され、恋物語も並行して錯綜し、それが半頁くらいの短文が重なり合うスタイルで文章が続くので、読者には読み進みやすい構成になっている。

本書はブラジルで刊行されるベストセラーとなり、米国でも英訳版（1983年刊行）が出版されると、ニューヨークタイムズ書評で「ブラジルのフロンティアをめぐる空想豊かな物語。人をつかんで放さない。ソウザはいくら称賛されても足りないくらいだ。」と絶賛されたこともあって、米国でもベストセラーになったのだ。

内なるユダヤ性との葛藤

1980年刊行の『マッド・マリア』は、20世紀初頭、ロンドニア州で難工事（工事中事故や熱帯病による死者は6千とも2万とも）の末、1912年に完工したマテイラ・マモレ鉄道の建設にまつわる歴史物語だが、2005年にグローボTVでドラマ化（全35話）され、大いに話題となった。このドラマにはアナ・パウラ・アロジオ、アントニオ・ファグundes、トニー・ラモス、ファビオ・アスンソンといった有名俳優が複数参加したこともあって、完成度も高かったから、原作者マルシオ・ソウザに改めて脚光が当てられたのであった。

紙幅もなくなったので、彼のユダヤアイデンティティについて略述しておきたい。

彼のルーツは、19世紀モロッコからアマゾンへ移住したセファルディ系ユダヤ人であり、彼のユダヤ論には、イスラエル訪問（ファミリーのなかで初めてイスラエルへ“帰還”し、エルサレムの「嘆きの壁」に立ち会えた）やブラジル史におけるユダヤ人のプレゼンスなどについて書き込まれているが、彼は通常の文学活動では「自分はユダヤ人だ」と公言することはほとんどなかった。筆者としては、この“内なるユダヤ性”と文学との関係を深読みしたいと考えている。合掌。



▲ユダヤ論集（M・シクリアルとM・ソウザの共著）

エミレーツ航空が、南米を近くする。

リオデジャネイロ*
サンパウロ

ブエノスアイレス

FLY BETTER

エミレーツ航空は、サンパウロ、リオデジャネイロ*、南米のブエノスアイレスを含む全世界150以上の都市に就航。シームレスな乗り継ぎで、よりスムーズで快適なビジネスラベルをお楽しみください。

ワンランク上の空の旅へ。エミレーツ・ビジネス

Emirates

水泳・競泳
HIROKO
MAKINO

マラソン
YUKI
KAWAUCHI

スキー・ジャンプ
RIKO
SAKURAI

パラ水泳
CHIKAKO
ONO

パラ陸上(やり投げ)
TAKUYA
SHIRAMASA

車いすバスケットボール
AMANE
YANAGIMOTO

車いすバスケットボール
KEI
AKITA

ワクワクするような挑戦を

あいおいニッセイ同和損害保険は、挑戦するアスリートとともに成長していきたいという想いのもと、
全社員が一丸となって、スポーツ支援を行っています。

立ちどまらない保険。

MS&AD あいおいニッセイ同和損保

CAFÉ
**FAZENDA
ALIANÇA**
SPECIALTY COFFEE
SINGLE ORIGIN



Encantando os paladares mais exigentes
O café produzido no município de São João da Boa Vista que fica na região centro-leste de São Paulo, pelo empresário Renato Ishikawa, é cuidadosamente elaborado a partir de grão 100% arábica, selecionado a cada lote e possui certificados internacionais de qualidade (Rain Forest Alliance e UTZ), e além disso, preocupado com a proteção ambiental, preserva 30% da mata virgem onde a exigência legal é de 20%.

コーヒーを愛する人への極上の一時
サン・ジョアン・ダ・ボア・ヴィスタ市(サンパウロ州の中央部)で、日系実業家石川レナト氏の農園で生産されたコーヒーは、ロットごとに選別された100%アラビカ豆から丁寧に作られており、厳しい国際的品質証明書(レインフォレスト・アライアンスとUTZ)を取得しています。さらに、環境保護法でコーヒー農園に課せられている20%の森林保全に対し、30%を保全し、環境にも配慮しています。

日本代理店

ミカド珈琲店 日本橋本店

ミカドコーヒー 日本橋室町三井タワー店

ミカドコーヒー 軽井沢旧道店

ミカドコーヒー 軽井沢 プリンスショッピングプラザ店

ミカドコーヒー 軽井沢ツルヤ店(スーパーツルヤ軽井沢店)

株式会社ミカド珈琲商会

サザコーヒー筑波大学アリアンサ店

オンラインストア <https://mikado-coffee.com>

住所

東京都中央区日本橋室町1-6-7

東京都中央区日本橋室町3-2-1, 日本橋室町三井タワー5階CAFE & BIZエリア

長野県北佐久郡軽井沢町大字軽井沢786-2

長野県北佐久郡軽井沢町軽井沢1178-798

長野県北佐久郡軽井沢町長倉2707

東京都港区三田2-21-8

茨城県つくば市天久保3丁目1

ブラジル・サンパウロでお住まいをお探しでしたら
コジロー出版不動産部にお任せください

日系進出企業の駐在員が多数住むサンパウロ市パライゾ地区の
優良アパートをご紹介します。

内覧からオーナーとの交渉、契約書締結、お部屋のリフォーム
家具の購入、入居手続きの立ち会いまで全て日本語でサポートいたします。

フラットホテルの手配も行っております。

ブラジルへ渡航される前にお気軽にお問い合わせください。

↓ お問い合わせ（日本語どうぞ）



LINE +55 (11) 99478-2433

✉ ed.kojiro@gmail.com

物件の写真はこちらでご覧になれます → https://note.com/pindorama_re | [@pindorama.real.estate](https://www.instagram.com/pindorama.real.estate)

ふせなおすけ
担当 布施直佐（不動産仲介業者）
不動産業者協会登録番号 (CRECI)
258600-F



Leading You Forward

充実の体制で中南米に関する高品質なリーガルサービスを提供

中南米における豊富な駐在経験と現地事務所との密接なネットワーク

西村あさひ法律事務所は、世界18拠点で750名を超える国内外の弁護士が緊密に連携し、最高レベルのリーガルサービスをワンストップで提供する日本最大の国際的総合法律事務所です。ブラジル、メキシコ、アルゼンチンをはじめとする中南米各国での駐在経験がある弁護士を含む中南米プラクティスグループを設け、ノウハウや情報の蓄積に努めております。また、中南米の主要な国の多くの有力法律事務所との間で人材交流も含めた強固な関係を構築しているほか、Lex Mundi等の国際的な法律事務所ネットワークを活用し、中南米のほとんどの国において有力な現地法律事務所と関係を有しています。

東京およびニューヨークから有機的にサポート

西村あさひ法律事務所の東京事務所には、中南米の法務について豊富な経験を有する弁護士が多数在籍し、日本企業の皆様の中南米における事業展開をご支援しています。また、ニューヨーク事務所(Nishimura & Asahi NY LLP)においても中南米に駐在経験がある弁護士が常駐し、東京事務所とニューヨーク事務所の各弁護士が有機的に連携することで、日本と中南米の地理的な距離や時差のギャップを埋めつつクライアントの皆様へ万全のサポートをご提供しています。

NISHIMURA & ASAHI

西村あさひ法律事務所の中南米プラクティスに関する弁護士等、主な案件実績、関連する論文/セミナー等については、以下よりご覧ください。



ブラジル



www.nishimura.com

お問い合わせ

latinamerica@eml.nishimura.com

東京事務所 中南米担当: 清水誠、古梶順也
ニューヨーク事務所 中南米担当: 山口勝之、梅田賢

Churrascaria
Que Bom!
www.que-bom.com

Produzido pela
ATHLETA®

LOJA ASAKUSA
TEL: 03-5826-1538
TOKYO-TO TAITO-KU
NISHI ASAKUSA 2-15-13 Nikkoshi B1F

LOJA SHIMBASHI
TEL: 03-6402-5685
TOKYO-TO MINATO-KU
SHIMBASHI 4-1-1 SHINTORA CORE 2F

Tokyo Nagoya Osaka Fukuoka Bangkok Beijing Shanghai Dubai Frankfurt Düsseldorf
Hanoi Ho Chi Minh City Jakarta*1 Kuala Lumpur*1 New York Singapore Taipei Yangon *1 Associate office

360° business innovation.



世界の未来を、ブラジルとつくる。

[Business innovation-1]

鉄道と港湾を一体化させ、物流を効率化。

鉄道網と港湾ターミナルの複合一貫サービスを提供するVLI社に出資参画。
たとえばサントス北西のティブラム港で、取扱貨物を次々と拡大。

[Business innovation-2]

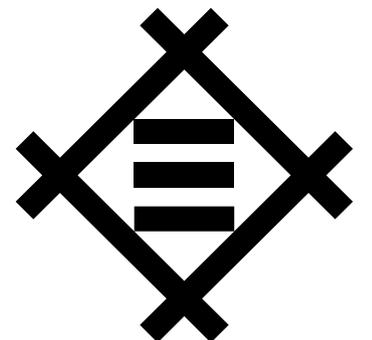
現場のニーズに細やかに応える農薬事業で、農業の発展を。

オウロフィーノ社に出資参画。大規模な農地が多いブラジルで、
気候条件に適した農薬製剤を開発。作物の順調な生育を農薬で支え、増産や品質向上に貢献。

[Business innovation-3]

自動車リースで、社会をもっと便利に、もっと豊かに。

中南米最大の自動車市場ブラジルで、トヨタと共に B to B 向けリース事業“KINTO”を展開。
カスタマイズ自在のサービスで、社会全体の「保有」から「利用」という動きに応える。



世界の未来を、世界とつくる。三井物産

MITSUI & CO.